

古代ギリシア人の酒の割り方

水谷 智洋

98年7月の研究発表会で浮田三郎先生が、酒が登場する日本と現代ギリシアの諺を対照するお話をされましたが、私はそのごく一部に触発され、古代ギリシア人がブドウ酒を飲むとき、どの程度、水で割ったかを調べてみました。以下はその簡単なご報告ですが、材料のほとんどはアテナイオス Athenaios の『宴席の学者たち』*Deipnosophistai*（とくに X. 426b 以下）から採られていますから、ご関心の向きは、どうか、そちらを御覧願います。

まず、最も大量の水で割って飲む酒——つまりは、最も強い酒ということでしょう——といえば、イスマロス Ismaros の酒が思い浮かびます。これは、オデュッセウスが、トロイアから帰国の途中、真っ先に立ち寄ったキコネス族 Kikones の町イスマロスで、アポロンの神官マローン Maron からもらったブドウ酒で、『オデュッセイア』第9巻208行以下には、20倍の水で割ると、混酒器からえもいわれぬ甘い香りが漂い出て、とても飲まずにはいられなくなる、とあります。そしてオデュッセウスは、ご存知のように、単眼巨人のキュクロプスのひとりポリリュペーモス Polyphemos にこの酒を飲ませて酔いつぶすのですが、巨人が口にしたのは、椀にたった(?)3杯(360f.)とありますから、この場合は、生のままでグイグイ飲ったのでしょかり。

もう少し現実的な場面に目を転じますと、ヘーシオドスの『農と暦』(前700年頃)に、「三度、水を注ぎ、四度目に酒を注げ」(596)という1行があります。水と酒の比が3:1(以下、比は水対酒)というのは、いささか薄すぎるような気がしますが、ここでは真夏の戸外で労働中の食後の酒ですから、この程度が適当なのでしょう。これより弱い割り方では、前3世紀の喜劇詩人アレクシス Alexis の断片(Kock ii. 380)に出る4:1があります。でも、さすがにこれは、「あまりに水っぽい(ὕδαρης)」と退けられています。アメイプシアース Ameipsias(前5世紀)、ヘルミッポス Hermippos(前5世紀)、ニーコカレース Nikokhares

(前4世紀)らの喜劇詩人の断片にはまた、5:2の割り方も言及されています。アテーナイオス中の話者のひとりによれば(X. 428e)、この5:2の割り方、もしくはヘーシオドス御推奨の3:1のそれが、世間一般でよしとされる飲み方なのだそうです。

同じ断片でも、古い抒情詩人たちのそれの方が、格段によく知られていましょう。アルカイオス Alkaios(前7世紀)の346 L-P およびアナクレオン Anacreon(前6世紀)の356(a) L-Pは2:1、また後者の409 L-Pは、もっと強く5:3で割るように、と指示しています。ついでながら、アナクレオン356(b) L-Pには、「もうスキュティアー風の飲み方(Σκυθηκὴν πόσιν)は止めましょう」との詩句があり、ブドウ酒を生そのまま飲むことをスキュティアー人の習いとして蔑視した最古の証言となっています。

アリストパネースの喜劇には、さらに強い割り方が登場します。『騎士』(前424年)1187行では、腸詰め売りがデーモス(市民)のご機嫌を取りむすぶべく、3:2に割った酒をすすめ、『福の神』(前388年)1132行では、ヘルメースが、以前よく口にした1:1(ἴσον ἴσῳ)で割った酒がなつかしい、と嘆いています。ἴσον ἴσῳはまた、アリストパネース以外の喜劇詩人の作品から8例がアテーナイオスに引用されており、そのひとつ、クラティーンノス Kratinos(前3世紀)の断片(Kock i. 69)には、ἐγὼ δ' ἐκτῆκομαι(「この身が溶けるようだ」とでも訳しましょうか)という表現が見られます。アテーナイオスにはこの他にも、3:4、2:3、1:2という、もっとも強い割り方の例がそれぞれ一度ずつ、喜劇詩人の作品から引かれています。エピッポス Ehippos(前4世紀)の断片(Kock ii. 255)中の人物は、3:4で割った酒がよいという相手に、「そんなに強いのを飲むのかね(οὕτως ἄκρατον... πῆ;)」と驚きの声をあげています。

以上で、文献に現れたブドウ酒の様々な割り方はほぼ尽きていると思われるのですが、抒情詩人たちの件で、若干、問題が残っています。それは、2:1を指示していると上に記したアルカイオスの断片の第4行には、ἔγχεε κέρνας ἕνα καὶ δύοとあるのみで、実際には、2:1とも1:2とも解釈できるということです。この点は、従来、アテーナイオスに引かれている一文法学者の解釈に従い、2:1説を採ってきたのですが、D. Page, *Sappho and Alcaeus* (Oxford, 1955), p. 308は、これを退け、悲しみを酔いにまぎらせようとしているこの詩の状況では、1:2の酒を痛飲するのではなければおさまりがつかない、と断じたのです。もうひとつ、5:3を指示しているとして挙げたアナクレオンの断片も、単に2つの数が並べられているのみで、しかも、1行だけの断片ですから、文脈も不明ときて

います。ですから、どちらが水で、どちらが酒かの判定は、本当は困難なのですが、アテーナイオス (X. 430 d) の筆致から、前者を水と推し測っているという訳です。(ちなみに、Page も、アナクレオン 409 L-P の 5:3 については、これを水対酒と理解しています。) この 2 点について、The Loeb Classical Library 中の *Greek Lyric* (Vol. I, 1982; Vol. II, 1988) の訳者 D. A. Campbell は、アルカイオス、アナクレオンの両断片とも、大きい方の数を酒としています。私の意見では、アルカイオスについては、Page の言うところももっともですから、賛成してもよいのですが、アナクレオンを 3:5 と解するのは、勇み足ではないかと思われます。

注

1) ホメーロスに出るイスマロスの酒は、後 1 世紀のプリーニウスの『博物誌』(XIV. vi. 53-54)では、*vinum Maroneum* の名で登場し、3 度コーンスルを勤めたムーキアーヌスがトラキアの現地で確かめたところとして、黒色で芳香を放つこの酒は、8 倍の水で割る習慣であるとの報告が記載されています。